

人間市教育

会報 No.59

発行 令和6年2月28日
 発行者 人間市教育研究会
 代表 会長 倉根 勝彦



会長あいさつ

人間市
 教育研究会
 会長 倉根 勝彦

令和五年度の本研究の活動も残りわずかとなりましたが、会員の皆様のご協力により無事に終わろうとしております。

コロナ禍も四年目を迎えました。が、昨年五月には五類に移行となり、感染症対策を講じながらも、コロナ前に近い形で事業を実施してまいりました。

十二月には、昨年に引き続き参集型で研究発表会を実施することができ、発表校にとっては、先生方に参観していただくことで、やりがいを感じることができました。人間市の教育を推進するための大事な機会であったと感じています。

コロナ禍と働き方改革をきっかけに本研究会の活動も見直しが行われてきました。ズームを使用し、その一例と言えます。ズームを使用することで、移動時間がかからず、校務の時間を確保できる等の利点がありますが、研究発表などでは、その教室ならではの雰囲気やズームから感じることは難しいところがあります。アフターコロナを見据えると、ズームの使用については、引き続き効果的な場面を見極めつつ、本研究会の研究を、さらに前進させていきたいものです。

結びになりますが、人間市教育委員会教育長 中田一平様をはじめ委員会の皆様、本会員の皆様、各校理事の先生方、そして各研究部長の先生方をはじめ、多くの先生方に本研究会の運営や事業に對しまして、多大なるご尽力をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

令和五年度

夏季講演会

「探求と協同の学びの創造」

学びの共同研究会

スーパードバイザー

谷井 茂久 氏

探求と協同こそが求められるこれからの学力だろうと思います。協同の学びは、他者がいることによって一人では到達できない深みまで到達できる、互いに他者の力を借りることによってもっと高く広い世界をみるることができるような学びです。そして探求は、知的冒険です。今まで登ったことの無い高く険しい山登りへ他者の力も借りながら挑戦していく。学ぶことが世界の見え方や生きていく希望につながっていくような学び、これこそが我々が一番大切にすべきことだと思います。

探求と協同の学びの創造で大切な事は、一人も一人にしないということとです。他者がいることによって初めて互いの力を借りることができ、協同の学びによって二人では見ることのできない広い景色が見えてくる、一人では到達できない深みまで到達していく。それが学校の存在

理由です。そのことを通して、一人残らず子供の学ぶ権利を保障していく。これを実現できるのが、探求と協同の学びだと考えています。

探求と協同の学びを創り出すには三つの要素が必要です。一つは、ジャンプの課題。探求型の課題を用意すること、二つ目は学びの真正性とも言える、教材自体が持っている本質的な価値に子供が深く出会っていくこと、三つ目は他者がいることによって自分の学びがより深くなる、聴き合う関係です。一番大切な「聴く」は教材から聴くことです。

そして教材から感じたことを他者に聴いてもらう。教材から聴き取ったものをお互いに聴き合うということとです。基本はペアでの聴き合いです。普段からペアで聴き合う関係を作っておいて、早めにグループで探求する場面をつくりましょう、というのが考え方です。ちゃんと聴いてくれるあなたが隣にいるという関係を作っておくことが大切です。正解か不正解かではなく、本当に自分が感じることや考えたことを大切にしていこう。

我々教育に携わる者は、子供の姿を通して考え学んでいくことが最も大切と思っております。

令和五年度研究委嘱発表校

「豊かな心をもち、

よりよく生きようとする児童の育成」

「対話」を通して考えを深める道徳科の授業の工夫」

藤沢南小学校

一 主題設定の理由

本校では学校評価・教職員の意識調査から、児童の自己肯定感が高くない傾向にあることが課題であることが分かった。自分の思いや願いを表現できる、自分に自信をもてる児童を育てるために、「豊かな心」を、全教育活動を通してどのように育成するのかを考えた。その中で「特別の教科 道徳」を研究の柱とし、研究の視点を設定し取り組むこととした。

二 研究の柱

- ①豊かな心の育成を、全教育活動を通して行う。
- ②豊かな心を育成する柱として、道徳科を位置付ける。道徳の授業では対話を通して考えを深めていく。

三 研究の取組

日々の授業充実のために、全教員が研究授業を行い、指導力向上を図った。昨年度の研究を整理し、

- ①道徳的価値の明確化
- ②思考ツール
- ③児童の発言に対する教師の問い返し
- ④振り返りの四点を研究の視点として設定し、研究協議を重ねた。時間で自分の気持ちを表現する。



四 成果と課題

- ①成果
 - ・道徳を楽しみにしている児童が増えた。
 - ・ねらいの立て方や主発問・問い返しの工夫など授業作りの基礎を学ぶことができた。
- ②課題
 - ・子どもの心をさらにうまく引き出して授業を展開できるようにする。

「一人もとりこぼさず、

だれもがわかる・できる授業づくり」

「国語科「読むこと」領域の指導を通して」

新久小学校

一 主題設定の理由

全国埼玉県学力・学習状況調査において、本校の児童の学力は全国、県、市の平均よりどの教科も下回っており、クラス内の学力差が大きい。また、個別支援を必要としている児童も多く、授業に参加できない児童もいた。そこで、全教科の土台となる国語科にしばらく、全児童がわかるでできる授業づくりをめざして、教員のさらなる授業力向上を図りたいと考え、本研究主題を設定した。

二 仮説

全児童が授業に参加するための工夫をすることで、一人もとりこぼさず、だれもがわかるでできる授業づくりができるであろう。

三 研究の取組

- ①授業の焦点化
- ②児童の実態把握
- ③学び合い
- ④授業のUD化
- ⑤授業のふり返りの充実
- ⑥自主学習の推奨、読書の推進など授業時間以外の活用



四 成果と課題

児童中心の授業を構成していくことで、主体的に授業に参加する児童が増えた。また重点事項を二つにしばって指導することで、各単元の指導項目が「わかった」「できた」という児童が増え、UD化やICTの活用で、配慮を要する児童も授業に参加できるようになった。さらに学び合いの中でジャンプの課題を設定することで、学習意欲の向上に繋げることができた。

授業内容の理解に関する児童の意識は向上したが、学力面では依然として課題があるためさらなる学力向上策の研究を続けていく。

「人間関係作りを通して

体力を高める児童の育成」

東町小学校

一 主題設定の理由

長引くコロナ禍の影響から、子供どうしが関わり合う活動が制限され、良好な人間関係の構築に制限がかかっていたこと。加えて埼玉県では、本校も例に漏れず、「運動好きな体育嫌い」の児童が多く、体育科を通して人間関係を築き、体力を高められないかという背景から、主題の設定に至った。

二 研究の仮説

前述の主題を達成するため、
①魅力的な活動を取り入れることで、進んで運動に取り組み、体力の向上につながるであろう。
②意図的に仲間との関わり合いを取り入れることで、教え合い、学び合いが深まり、体力の向上につながるであろう。

三 具体的な組織、取り組み

本校では、研究推進委員の下部組織として、「授業研究部」と「体育的諸活動部」を組織した。授業研究部では、教材、教具の作成や仮説にせま

る手立て等を中心に研究し、体育科授業のスタンダードの作成を行い全職員に浸透させることができた。一方、体育的諸活動部では、校庭環境の整備、各種アンケートの実施、検証、掲示物作成等を行い、二年間を通し児童の実態把握を調査した。

四 研究の成果

二年間の研究を通し、子供たちは、仲間どうしの関わり合いの中で大きく体力を伸ばすことができた。また、子供たちの学び合い活動も活発となり、保健体育の座学の授業でも、タブレットを活用し、もう一つの体力の概念である、「防衛体力」を高めることができた。高度な体育の授業が行えるようになった反面、複雑化するルールの対応や、より質の高いアドバイスの促し方法などが課題に挙がり、今後実践を通し追求していく。



「児童が互いに認め合い、伸び伸びと

自己表現できる学級と学びの土台づくり」

国語科の学習を通して」 高倉小学校

一 主題設定の理由

埼玉県学力学習状況調査の他、日々学習している子供たちの様子から、文章問題の無答率が高いこと、問われている内容が理解できていないことが本校児童の課題としてあげられた。そこで、国語科を通して学び合いの研究を行うことで解決していくこととした。

二 研究の仮説

児童の読む力の定着と伝え合う力の向上を図るために、①学習する楽しさや伝える楽しさを味わい、②互いに考えを伝え合う経験を積むことで、児童が互いに認め合い、伸び伸びと自己表現できるようになるであろう。

三 研究の取組

- 次の手立てを設定し取り組んだ。
- 高倉スタンダードの統一
- 意図的な音読の取組
- 必要感のある学び合い
- コ字型の机配置での学習



仮説①への手立て

- 視覚的・実感的な教材
- 教師の返し言葉(どうして?本当に?ほかには?)
- 振り返りカードの活用 等
- 仮説②への手立て
- ペア・グループ学習
- オクリンクの活用 等



四 成果と課題

【成果】

- 児童が学習の見通しをもち、進んで学習に取り組めるようになった。また、その環境が整った。
 - 抵抗なく自分の考えが言えるようになり、主体的に学ぶ習慣がついた。
 - 学習の楽しさを感じたり、人の考えを認めたりするようになった。
 - 確実に読む力が伸びてきた。
- 【課題】
- ・友達の考えをつなぎ合わせて考えを生み出していくための手立て。
 - ・振り返りの時間の確保。

「主体的に学ぶ生徒の育成」

「個別最適な学習」と「協働的な学習」を軸に

藤沢中学校

一 主題設定の理由

主体性とは、考えや行動が他の人から見ても正しいと判断される性質と考えている。そのためには、生徒自らが「やりたいこと」を探る過程で、より自己を高めていくことが大切である。

そこで、生徒が自己調整をしながら学習を進められる「個別最適な学習」と、他者と学び合う「協働的な学習」を軸に研究に取り組んだ。

二 研究の仮説

自己調整をしながら学習に取り組む、考えを比べ合うことができれば、自分の学びをさらに高めていくことができる。結果、生徒はより主体的に学びに取り組むようになると考えられた。



三 主な取組

① 生徒の学びに着目した

授業研究会

・教科の枠を離れ、指導内容ではなく生徒の学び方の観察。
・学びの往還を意識した授業運営。

② 「やりたいこと探し」

エネルギーを学校生活、地域へ

・見直すべき校則を全校に問う。
・藤沢未来ネットとの共同事業。

③ 自分で学びを調整する

新聞記事学習と家庭学習ノート

・興味関心から学びの選択。
・自由に自分のペースで実施。

四 成果と課題

県学力学習状況調査結果より、学力を伸ばした生徒の割合が、県平均を上回ることができた。また、主体的に行事へ取り組む生徒の姿勢は、参観者から100%「よかった」と回答を得た。

課題として、一人一人の学びを観察するための時間の工夫があげられた。今後も、生徒の主体性を育む教育活動に取り組んでいきたい。

「様々な教育活動におけるICTの活用」

野田中学校

一 主題設定の理由

「GIGAスクール構想」の推進により、学校のICT環境も大きく変化した。また、教職員の「働き方改革」もクロスアップされる現在、授業のみならず校務にも目を向け、ICT機器の効果的な活用について探求すべきと考えた。

二 研究の柱

主題実現の手段として、研究の柱を次のように設定し取り組んだ。

1 「授業・学習」での活用

① 家庭学習の充実
② 学習保障
③ ICTを活用することでできる授業、学び方

2 「校務」での活用

① 働き方改革の推進
② SDGsの推進

三 具体的な手立てとその成果

「授業・学習」では、eライブラリ等を活用して生徒の学習状況を把握し、授業改善につなげた。また、Zoomの活用により欠席者に対する学習保障を図った。さらに、全ての教

員がICTを活用した授業事例について研究した。

「校務」では、日常業務の負担軽減を図るためのシステムを構築した。日報・週報・月報等の二元管理・随時閲覧、大型モニタによる生徒への連絡、アンケート集計作業の効率化等を可能にした。また、職員会議資料、家庭への配付物のペーパーレスが実現された。

四 研究のまとめと今後の課題

本研究を通してICTの活用により得られる効果を再確認できた。授業では、板書やプリント配付の時間を大幅に削減し、生徒の「思考する時間」を今まで以上に確保することができた。教職員の業務プロセスの短縮・効率化も進み、負担軽減や限りある資源の有効活用にもつながった。



令和五年度研究委嘱校(一年次)

『楽しい授業の展開』

～教師の主體的な学びが
子の最適な学びをつくる～

扇小学校

一 主題設定の理由

令和四年度の研究より、児童に最適な学びをつくるためには、教師が主體的に学ぶ環境が必要であると考えた。そこで、教師が自ら課題を設定し、主體的に学ぶために本主題を設定した。

二 研究の取組

「発問力」「対応力」「課題設定力」「授業構成力」の中から、教師自身の課題を選び、研究した。

○三部会研究の実施

「授業研究部」「研究広報部」「調査研究部」に分かれ、複数の視点から研究を進めた。

○授業チェックシートの活用

児童の活動時間、二十五分以上、児童を褒め認める声かけの増加を目指して行った。

三 次年度へ向けて

より主體的な教師の学びの場を作るとともに、児童の学びあい活動の充実に努めたい。

『主體的に学び、表現する児童の育成』

～子どもたちが学びあう
国語科の授業の工夫～

金子小学校

一 主題設定の理由

本校は学力調査の結果等から国語科(特に読むこと)に課題がある児童が多い。そこで、国語科の研究を通じて児童の国語力を高め、自分の思いを自分の言葉で豊かに表現できる児童を育成していくため、本主題を設定した。

二 研究の取組

授業研究部と調査研究部を組織した。年間六回の授業研究を実施し、指導者の方を招いて指導をいただき、研究の積み上げを行った。

三 次年度へ向けて

研究授業等を通して研究が深まり、研究仮説と手立ての見直しを行い、学年ごとの学びあいの姿の系統性を整理できた。今後、児童にとつて魅力的な言語活動の設定や、言語活動に必要な技能の向上を図るための諸活動を学校全体で行っていく。

『進んで学び合う 児童の育成』

～算数科を中心に、
学び楽しさを実感させる
授業実践～

狭山小学校

一 主題設定の理由

昨年度までは、「わかる」授業を目指し、児童が進んで学ぶ手立てを考え、実践をしてきた。

今年度は、さらに児童の主体性を伸ばし、学ぶ楽しさをより感じられるよう授業改革に取り組みむこととした。

二 研究の取組

全担任が授業を行う算数科の指導を中心に「学び合い」を授業に取り入れ、授業研究を軸として全校一斉に「学び合い」に取り組みながら研究を進めることとした。学年で二回は授業研究を行い、ブロックや全体で見合い、協議会を行うことで、より良い授業実践となるように協議した。

三 次年度へ向けて

今年度、全校一斉に始めた「学び合い」について成果と課題をまとめ、狭山小学校としての「学び合い」を確立していく。その上で次年度も貫いた「学び合い」の授業を行っていくようにする。

『学び伸びる東金子の子 育成』

～一人一人に確かな
「生きる力」を～

東金子小学校

一 主題設定の理由

本校の実態として、学力向上をはじめ「生きる力」が喫緊の課題となっている。そこで本主題を設定した。学力向上の実現には、教員の指導力向上にかかっている。そこで教員の指導力向上に焦点をあてた研修とした。

二 研究の取組

- ① 授業改善に向けて
 - ・スタンダード作成
 - ・全教員が外部指導者を招聘して授業研究会を実施。国語算数道徳体育で研修した。
- ② 検証テストの実施
 - ・毎学期末に全学級で実施。学級ごとに児童の理解度を確認した。年度末には漢字の検証テストも実施。
- ③ 家庭との連携
 - ・学校だよりや学年だより、懇談会で学力・徳力・体力を話題にし、保護者への啓発を図る。

三 次年度へ向けて

今後も主體的、対話的で深い学びのある授業を実現すべく、教員の指導力向上に向け、研鑽を重ねていく。

「考え、議論する道德の 授業づくり」

黒須中学校

一 主題設定の理由

本校は「学び合い学習」の研究に取り組んで、七年目になる。「学び合い学習」の型や成果を活かし、さらに「思考ツール」を取り入れた授業展開を行うことで、「考え、議論する道德の授業づくり」ができるのではないかと考え、本主題を設定した。

二 研究の取組

①各学期及び夏季休業中に同一の指導者を招き、道德教育の基礎・基本や「思考ツール」を用いた指導法等について研修を積み重ねてきた。
②各学期一回、各学年に於いて道德の研究授業を行い、指導力を高めてきた。

三 次年度へ向けて

副題にもある「生徒一人ひとりが自分自身の問題と捉え、向き合う授業を通して」考え、議論する道德の授業を実現していく。

研究部研究の成果

社会

今年度の社会科教育研究部は、年度当初の主任会において昨年度に引き続き授業研究会を行うこととした。

以前から本研究部では年間のテーマを決め、各校で研究を進め、年度末には小中学校が隔年で校授業を公開し研究協議を行っていた。そこに参加する各校の主任も実践した授業の指導案を持ち寄り情報交換も行うことができた。

今年度はテーマを「学び合いの視点からの社会科学学習における小中学校の連携」とした。(寄稿する時点では未開催であるが)授業研究会は藤沢南小学校の小田誠校長先生にご指導いただき、東金子中学校の馬場教諭と島野教諭に提供していただく予定である。「中世の日本」の授業をもとに、具体的にどのような内容、場面で小中学校間で連携が図れるのか、確認する場とし、全校で共有する機会としたい。

技術・家庭科(中)

今年度の技術・家庭科教育研究部では、主任会にて各校の状況を確認し、授業実践等の情報を共有した。また、発明創意くふう展の作品選考・運営も例年同様に実施した。昨年度までは入間地区展覧会がコロナ禍により実施できず、市内展の最優秀作品を県展に出品するという方法を取っていたが、今年度は四年ぶりに参集による地区審査会を実施することができた。平日開催及び搬入出も含めて一日での実施となったが、熱意あふれる作品に多く触れることができ、学びの多い一日となった。

家庭科部においては、食育研究部・学校栄養研究部の合同講演会に参加させていただいた。ふしみ野市立西原小学校栄養教諭小峰論先生に「教員と栄養士が連携した食育の進め方」をテーマにお話しいただき食育への理解を深めた。

今後も各校の連携を密にとり、より良い指導につなげていきたい。

図工・美術

今年度は、「身体障害者福祉のための第六十四回埼玉県児童生徒美術展覧会」や「第五十八回郷土を描く児童生徒美術展」に各学校から選出された作品を出品した。また、二月下旬の「埼玉県児童生徒美術展」にも出品予定である。展覧会前や展覧会後に、新学習指導要領に合わせた指導や評価のポイントの研修を行い、子供たちの思いを表現させられる指導力をつけられるようにしていた。どの展覧会においても、子供たちの思いが詰まった作品がたくさんあった。

また、十一月十七日に関東甲信越静地区造形教育大会埼玉大会が開催された。この大会では、さまざまな実践を知ることができ、参加者にとって有意義な

図工・美術の指導の学びの場となった。



保健

保健研究部では、四月に顔合わせ・事業計画立案を行い、七月に校務支援ソフトの研修、八月にプレゼンテーション研修、一月に保健主事との合同講演会を実施した。

校務支援ソフトの研修では、Windowsを活用して、市内全校で健康診断の結果・通知・統計が出せるように、オンラインで研修を行った。

プレゼンテーション研修は、小グループの中で、それぞれが準備した内容について発表を行った。各々のグループでの評価・振り返りを通して、知識を深め、個々の技術向上を図ることができた。

保健主事・保健主任合同講演会では、(株)均整動術の小林邦之先生をお迎えし、身体の歪みを直すことによつて、身体能力の向上や精神の安定に繋がることを学んだ。

生活

生活科研究部では、四月に顔合わせや事業計画の立案、夏季研修会では

は実技研修、二月に実践報告・情報交換会を行った。

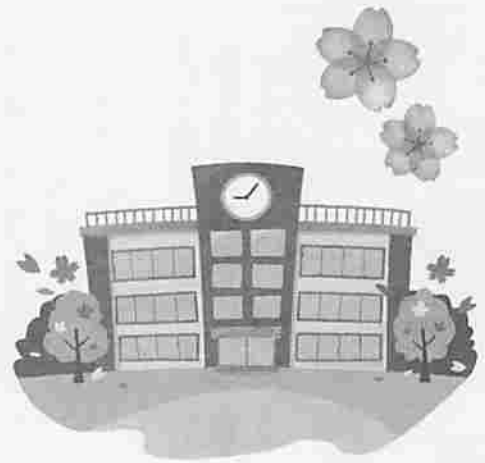
夏季研修会では、「秋のおもちゃづくりを通して指導に生かす実技研修」を行い、「年生」「あきのおもちゃをつくらう」の内容に沿つて、どんぐりナイスキャッチ・バランススワリー・穴あきバズルの三種類のおもちゃを作成した。プラスチックダンボールといった馴染みのないものなど、いろいろな材料や道具を用意したことで、子供にとつて扱いやすいものが何かを検討することができた。

また、子供がつまりやすい箇所や、より楽しく遊ぶための工夫についてグループで意見交換をしながら作成したことにより、子供たちがこれから体験する試行錯誤の場面を疑似体験するような深まりのある演習となった。

外国語活動

外国語活動研究部では、四月に顔合わせ、夏季研修会、二月に実践報告情報交換会を行った。

本夏季研修会では、外国語の授業でタブレットを使う際、どんな授業ができるか、ということテーマにした。



そこで、「株式会社math channel」から講師を招き、「kahoot(カフト)」というアプリケーションの使い方を体験しながら、指導内容を考える研修を行った。

参加者からは、「アプリの特徴から外国語活動以外にも、社会や理科などに活用できる。」「三年生や四年生のアルファベットの学習に使える。」「クイズ感覚で参加できるため授業の導入として効果的だ。」「このアプリを既に授業で活用しているが、本研修で新しい使い方を発見することができた。」

今後は、アプリケーション等の効果的な使い方を精査し、指導法の向上を図っていく。

図書館

学校図書館研究部は、例年、四月に研究協議と顔合わせ、九月に小・中学校に分かれて、読書感想文審査会を行っている。この審査会は、各校の校内審査を通じた作品を、さらに審査し、県の中央審査会へ出品する作品の選出を目的としている。

本年度は、九月十三日に中学校、九月十四日に小学校の読書感想文審査会を入間市教育センターで実施した。審査会を行うことで、読書感想文の作品としての重要なポイントや、読書をすすんで行おうとする姿勢を育てる取組など、情報交換も行うことができた。また、審査会の中で、小・中学校共通して、校内審査の段階で「課題図書」部門の出品が少ないという課題も明らかになった。今後は、部員の資質・能力の向上を目指した研修会も検討しつつ、引き続き円滑な審査会の実施を目指していきたい。

視聴覚

今年度の活動としては、鶴ヶ島第一小学校で実施された視聴覚情報教育研究会ICT活用研修会に担当が参加し、視聴覚・情報教育部合同研修会を黒須小学校で開催した。ICT活用研修会では、タブレット端末にインストールされているアプリケーションの効果的な活用方法について担当が研修を受けた。具体的な活用方法を紹介していただき、それらを視聴覚・情報教育部合同研修会で入間市全体に共有することができた。教科の授業だけでなく、総合的な学習の時間や委員会活動でも利用できるようなアプリケーションも多く、有意義な研修となった。

また、情報教育の年間指導計画を各校で共有し、来年度からの指導計画を作成した。

来年度はApple社の講師を招き、引き続きタブレット端末の実践的な使い方の研修を検討したい。

学校食育

学校食育研究部では、夏季研修会で学校栄養部と合同講演会を開催した。ふじみ野市立西原小学校栄養教諭の小峯論先生に「教員と栄養士が連携した食育の進め方」をテーマにご講演をいただいた。

子供たちに多くの体験をさせ、食に興味をもってもらうことで食べ残しが減ること。食育は生活習慣病の予防や健康寿命の延伸に繋がり、大人になってまで影響することなどを知り、食育の大切さを学んだ。また、食育の学習法や資料をいただくことにより、私たち教員自身が食育を進めていこうと思う気持ちを掻き立てられる内容だった。

今回の講演会を通して、今後も栄養教諭・栄養士と連携しながら入間市の食育を推進していきたいと思う。そのために、市内で授業を見合う機会をつくり、授業力の向上を目指していきたい。

生徒指導

本年度、生徒指導研究部として行った活動は、大きく二点挙げられる。

一 市内小中学校間の情報交換
二 地区事例研修会への参加

コロナ禍が明け、今までの日常に戻ってきた中で、過去に取り組んできた内容を見直し、時代に応じた積極的な生徒指導が求められている。

地区事例研修会では、「積極的な生徒指導」というテーマで入間市立藤沢小学校による発表が行われた。児童生徒が安心して学校生活を送るために必要なことを学ぶことができた。また他地区他校の取組も情報交換することで幅広い引き出しを持つことができた。

不登校やいじめ問題、自殺、ネットトラブルなど様々な問題があるが、それらの問題を予防するためにも、児童生徒だけでなく、保護者や地域に啓発活動を行っていくことの重要性を強く感じている。

人権教育

人権教育研究部では、例年、四月の主任会で今年度の目標や昨年度の事業報告、社会教育課からの人権教育に関する映像資料の紹介および活用についての連絡がある。

今年度の目標は、「発達段階に即した人権教育の推進」及び「人権教育の柱でもある同和教育における研修の充実」とした。

主な活動として、各校における人権標語や人権作文への取組と、七月に行った人権教育研修としての「狭山事件における講義及びフィールドワーク」を行った。

今年度も感染症対策の関係で授業研究会や人権に関する講演会の実施ができなかったが、来年度は実施できる方向で進めたい。また、豊岡小学校の「ことばの教室」で実施している講演会についても、人権教育研究部との共同開催として、来年度実施していけるように検討したい。

